

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マルチメディア時代の起点：  
イメージからみるメディア

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008397">http://hdl.handle.net/10502/00008397</a>

## プロローグ

私は、国立民族学博物館（略称民博）のコンピュータ民族学部門に所属し、情報科学と民族学の境界領域にかかわっている。情報工学出身ではあるものの、私はこの数年来、民博の民族学研究者とともにオーストラリア・アボリジニの世界に入り、現地でコンピュータ・ソフトウェアを開発し、それを現地のアボリジニたちに使ってもらおう、という不思議な経験をした。その中で、アボリジニたちの情報伝達がイメージに重点を置いたものであるらしい、という事実を知った。イメージとメディアのかかわりを考えるきっかけになった、アボリジニ世界での私のフィールドワークから話を始めたいと思う。

### 「オーストラリア・アボリジニの世界に入る」

英語aborigine(s)は一般に先住民を指すが、オーストラリア・アボリジニと固有名詞で呼ばれるのは、オーストラリア大陸や周辺諸島の先住民である。人口は約二八万、これはオーストラリア総人口の約一・六％に当たる。オーストラリア全土に散在して住んでいるが、大部分は都市化の進んだ南部に住み、生活水準の低い人もいるものの、白人とあまり変わらない生活を送っている。中央部や北部の農牧地帯に住む人々は主に牛牧に携わり、やはり白人と似た生活スタイルである。

しかし、中央砂漠や北部海岸部などに住む約三万人の人々は、一九二〇年代からこの地域

に保護区が設定され、白人の立ち入りが制限されるようになったこともあって、現在も狩猟採集の生活スタイルを残している。そのため彼らに民族学的な関心が集中してきたのである。

私が最初に入ったフィールドは、ノーザンテリトリ州の北部海岸に接したアーネムランドと呼ばれる地域である。北海道ほどの面積を持つアーネムランドは、今ではアボリジニの自治領となっており、一般の人は許可なしに入ることができない。ここには人口一〇〇〇〇人ほどの町が点在している。これらは、今世紀初頭から始まる保護隔離政策時代の一九二〇〜三〇年代に教会が作った町や、第二次世界大戦直後の同化統合政策の時代に政府主導で作られた町の後身である。もともとは数十人の小さな集団で移動しながら生活していたアボリジニの人たちが、これら人為的に作られた町に集住させられていたのである。

しかし、一九七〇年代初めから、先祖伝来の土地に戻り、数家族の親族を単位とする村、「アウトステーション」を作って伝統文化の復興を目指す人々が現れた。これらの村々は町から数十キロ以上離れているが、町と緊密な関係を保っている。町には、マーケット、保健所、学校、教会、美術工芸センター、役場、町議会など自治機構や生活支援組織がそろっており、町の住民だけでなく、村の住民にも、さまざまなサービスを提供している。

村には、トタンやキャンバスで作った簡単な小屋型の家が数軒から一〇軒ほどある。住居は簡素だが、鉄骨造りの小学校の分校が併設され、太陽光発電で地下水を汲み上げ、BSアンテナを立ててテレビを楽しみ、さらには、マイクログ波で中継される公衆電話も設置されるなど、村の姿はここ数年で様変わりしている。軽飛行機用の滑走路を備えた村もある。

村は、狩猟採集やさまざまな儀礼など伝統的な活動の舞台である。もっとも、ヤリやブーメランを使った狩りを想像するのは大きな間違いだ。男たちは、四輪駆動車に分乗し、互いに無線電話で連絡を取り合いながら銃を使って狩りをする。カンガルー、カモ、大トカゲなどが獲物である。海や川では魚やカメをヤスで捕らえる。女たちは、もっぱら木の実や貝などを採集する。こうした狩猟採集活動で村の食料すべてをまかなっているわけではなく、その比率は六〇七割にとどまり、残りは町からやってくるトラック定期便で購入する。小麦粉、砂糖、パックス牛乳、缶詰など、町のマーケットと同じ食料が手に入る。

このように、アーネムランドのアボリジニは、狩猟採集のスタイルは残しつつも、近代的道具やシステムをどんどん取り入れ、貨幣経済が浸透するなど、物質面では大きな変化を見せている。しかし、精神面では、ドリーミングと呼ばれる宗教体系とそれに基づく儀礼活動の伝統が生きている。昔々の神話時代に一族の土地や文化を創造した精霊たちが今でも自分たちとともにいて、夢を通して自分たちにメッセージを送ってくるという「ドリーミング」の観念は、精神生活のすべてを律している。成人儀礼、葬送儀礼、豊穡儀礼に伴う歌、踊り、絵画はすべて、人間の側から精霊たちへの語りかけである。ユーカリの木の皮に描かれる「木皮画」は、町の美術工芸センターを通して市場に出まわり、現金収入源の一つとなっているが、そこに描かれるのは、やはり、精霊たちの活躍する神話世界である。神話の舞台である各聖地は儀礼と強く結びついているので、アボリジニの土地権問題もまた、神話世界と切り離して語ることはできないのである。

町には、生活支援組織の一つとして、村の狩猟採集生活の道具である銃、四輪駆動車、ボート、無線電話機などを修理する工場がある。BAC (Bawinanga Aboriginal Corporation) と名づけられたこの機関の所長ボンド氏は、三〇年来、アボリジニの側に立って彼らを支援してきた白人であるが、彼は民博アボリジニ研究グループに対して、工場のさまざまな事務、例えば、修理依頼の受付や請求書発行業務をコンピュータ化したい、と言いつ出した。そこで、私が現地に出かけ、アボリジニ従業員にも使えるようなソフトウェアの開発にあたることになった。これが一九八九年のことである。

これらの業務を処理するソフトウェア・システムが実現すれば、現地での修理業務を支援すると同時に、アボリジニたちの狩猟採集活動の記録を間接的にデータベース化する機能も併せ持つことになる。そのデータは、民博アボリジニ研究グループにとって、アボリジニの狩猟活動を解析するのに貴重な資料となりうる。

BACは、修理業務のほかに社会保障費の給付も行い、また美術工芸センター部門ではアボリジニの芸術作品の買上げや販売も行っている。社会保障費の給付事務を電算化すれば、アボリジニの複雑な親族組織を解明するのに役立つデータが集まるだろうし、芸術作品の買上げや販売業務を電算化し、作品のテーマや素材などをデータベース化できれば、アボリジニ芸術の変容を追跡することも可能となろう。このようにして構築された「アボリジナル・データベース」は、アボリジニ文化の研究素材となるとともに、現地コミュニティ自身の意思決定に役立つはずである。

民博アポリジニ研究グループはこの「互恵性」に着目した。現地から情報を収集するばかりで、逆方向の還元を伴わないことが多い従来のフィールドワークとは異なり、現地の人たちの立場に立ち、その利益になるものとして、私たちはこのプロジェクトを推進することになったのである。

こうして、私のソフトウェア開発が始まった。当時、BACの白人やアポリジニ従業員に、キーボードに触れたことのある人は皆無であった。そこで私が開発するソフトウェアは、彼らにも扱いやすいユーザ・インタフェースを備えている必要がある。二週間の期限内になんとかソフトウェア開発を終え、実際に使用する従業員に講習会を行うことになった。このとき私は、アポリジニの典型的な学習態度に出会うことになる。

### 「アポリジニの学習態度」

講習会は、私が逐一操作法を説明しながら、従業員たちに実際に触ってもらい、私が彼らの疑問に答えるという形で進行した。一人のアポリジニN氏は、積極的に皆の目の前でキーボードに触れ、私から間違いを指摘されながら学習する態度を見せた。しかし、もう一人のアポリジニG氏は、その場では決してキーボードに触れようとはしない。こっそりと後ろから私たちの様子を窺うだけなのである。

その翌日のことである。食事のために皆が帰宅している昼休み、誰もいないと思っていたコンピュータ室から、プリンタの打ち出し音が聞こえてくる。はて誰だろうと、そっと近づ

くと、G氏が一所懸命にパソコンと格闘しているのである。陰から見ていると、結構間違いない操作を進めていく。軽いタッチのキー操作も実にうまい。どうやら、人前では私たちの操作を観察するだけだが、まわりに誰もいなくなると、自分でこつそりと練習を積んでいたものとみえる。私は彼の邪魔になるのを恐れ、その場は気づかれぬように退散した。

ボンド氏にこのことを話すと、さもありませんという顔つきで、アポリジニの学習について、次のような非常に重要な観点を指摘してくれた。

N氏は、実際はあまりよく理解していないのに、返事だけは調子のよい「オウム返し」型であり、アポリジニとしてはむしろ例外である。G氏の学習態度が、まさにアポリジニ社会に伝統的なものである。アポリジニは元来無文字社会であったにもかかわらず、神話やそれに関する儀礼などの精神文化は実に確かな形で伝承されているが、その方法は、西欧流のそれとはかなり異なっている。儀礼に伴う踊りは、神話に登場する人や動物の動きを主体にしたダイナミックなものだが、これを教える側は生徒側にあれこれと指示するのではなく、とにかく演じてみせ、生徒側はそれを自分の動きとして頭の中にイメージを再構成できるまで、じっくりと観る。スポーツの世界のイメージ・トレーニングに似た方法だ。G氏の態度もまったく同様で、他人の操作をじっくり観察してイメージ学習を行い、得心するまで自分で練習しているのだ。こそこそ練習しているように見えるのも、彼らが他人からこと細かく指示されるような教育に慣れていないし、それに反発するプライドの高さを示しているのだった。

このほかにも、アポリジニがイメージ的な空間認識に優れていると思われる点がある。彼

らの芸術作品であるアーネムランドの「木皮画」や中央砂漠地域の「砂絵」は、創世の時代に神々が旅をしながら土地や部族を作った、というモチーフが中心である。これらの絵では、旅の様子が、上空から地上を俯瞰した地図のように描かれる。それらは、必ずしも実際の物理的な距離を正確に反映しているわけではないが、方向性や人が移動する際の時間距離を表した地図と見なせば、極めて正確なものだという。

彼らの狩猟活動に同行した研究者によれば、日本人にはまったく同じように見える森のパターンの中からランドマークを見いだし、決して帰り道を間違えることはない。植生、地形や地質の特徴など、風景を構成するあらゆるものが、彼らにとってランドマークなのである。こうした地理的な把握の能力は、彼らが伝統的に移動するタイプの狩猟採集民であったことと、深くかかわっているに違いない。この点は、地面に残る痕跡から情報を読みとる優れた能力を見ればいっそうはつきりする。私流に言えば、彼らは足跡文化の人々なのである。

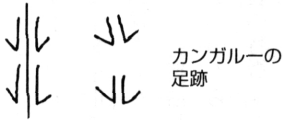
### 「アポリジニの足跡文化」

地面に残る痕跡が彼らの世界認識に極めて重要であることは、特に中央砂漠地域の「砂絵」を見れば明らかである。神々が旅をする神話を表現した「砂絵」は、かつては儀礼の際にだけ砂の上に描かれ、儀礼が終われば消し去られるソフトな絵画であったが、一九七〇年代に入ってからキャンバス画というハードなメディアに置き換えられ、点描とそれぞれに複数の意味を持ついくつかのシンボルで構成されるという特徴を持っている（図0—1）。



[砂絵のシンボリズム]

(Nancy D. Munn, *WALBIRI ICONOGRAPHY: Graphic Representation and Cultural Symbolism in a Central Australian Society*, Cornell University Pressより)



カンガルーの足跡



エミューの足跡



稲妻、ヘビの通った跡



野生のシチメンチョウの足跡



タカの足跡



人の足跡



キャンプ、または、文脈によって泉、火、丘など



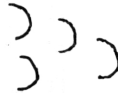
真っ直ぐな道、または、文脈によって木の幹、背骨など



座っている人



洞窟、木の枝で作った風除け、虹



肋骨、貝殻、雲、モグラの穴、など



雨粒、卵、アリ、など

(図0-1)

オーストラリア全土のアボリジニにポピュラーな「七人姉妹」の話もカンバス画によく描かれる。ある日の午後、その一枚を前に、おばさん芸術家が、神話を私たちに語ってくれた。

ダンサーとしても知られる彼女は、思い入れたっぷりの動作や表情で、七人姉妹の逃避行を語ってくれたが、それは長い長い旅の話のほんの一部にすぎない。日本の絵巻物、襖絵や書き割りとは異なり、長い時間経過と広い空間にまたがる事件が、一枚のカンバス画像に凝縮されている。キャ

ンブ、泉、洞窟を表すシンボルとともに、登場人物の動きはすべて足跡で表現される。すなわち、時間軸の上に逐次的に生じた数々の事件は、その軌跡や痕跡を積み重ねることによって表現され、いわば時間軸上で積分されて画像化されるわけである。

地面に残された痕跡に基づいて、獲物を追い、事件がいつ頃起こったかを推測する狩猟採集生活が、痕跡や足跡からシンボリズムを生み出し、それらを用いた「積分型」の表現手法を生み出したのであろう。足跡や痕跡へのアボリジニのこだわりは、さまざまな生活場面で見られる。人の足の裏は個性を持っている。足指の開き具合、傷、土踏まずの広さなど、細かな特徴を数え上げていけば、顔と同じように個人を識別することができるのである。足跡は、こうした静的な特徴だけでなく、歩行運動が残した動的な特徴をも併せ持った情報源である。移動の方向のみならず、足跡の深さから、運んでいた物の重さ、どちらの肩に担いでいたのか、どれくらい速さで走って行ったのかなど、ホームズばりの推理が可能である。足跡からその持ち主の行動を推理する能力は、狩猟採集民として当然のものといえよう。

日本と西欧の文化を身体論的に比較する議論がある。それによれば、手を重視する日本人に対し、西欧人は足を大切にするのだという。なぜなら、農耕民であった日本人は、農作業の際に大地に足を踏ん張り、手を動かすことが大事であったが、狩猟・牧畜民であった西洋人は、動物や家畜を追う必要から、自由に動く足が大切だというわけである。この伝でいけば、狩猟採集民アボリジニは足の文化に属するのだが、さらにいうならば、足跡文化に属するのであろう。

面白いことに、地面に残る痕跡を読む彼らの能力は、足跡だけでなく四駆車の轍についても遺憾なく発揮されるのだ。中央砂漠地域やアーネムランドでは、一九七〇年代初めからのアウトステーション運動と連動して、道路の整備がずいぶん進んだが、ほとんどは未舗装の地道である。実はここに意味がある。地道に残る轍は大切な情報源なのである。これを見たアボリジニは、いつ頃A村の車がここでB村の車と出会ってそれぞれどの村に向かった、と人々の行動を推測し、それに適切に対処する。そのために、地ならし機でならずだけにとどめ、意図的に舗装しないのである。彼らにとって、地面に残る痕跡はすべて何らかの情報を伝えるメディアなのではないだろうか。

### 「コミュニケーションにおけるイメージ」

アボリジニの社会に入ってみて私が気づいたのは、彼らの学習が文字によるマニュアルを伴わない、自主的なイメージ学習が基本であることだ。教師が実践する姿を視覚から取り入れ、それを自分の頭の中でイメージに組み替え、それを実践の中で繰り返し修正しながら、目標の姿に近づけていく。こうした学習態度は、もちろん、彼らが伝統的に無文字社会であったことと関係があるだろう。そして、彼らの伝統的社会が、「ホルド」と呼ばれる小集団から成る狩猟採集社会であり、時空間を共有できる社会であるために、イメージによるコミュニケーションが容易であった点にもかかわるであろう。さらに、地図や空間を視覚的に読みとる能力も、彼らがイメージの操作に優れていることを示唆している。

しかしながら、よく考えてみれば、イメージを介したコミュニケーションや物事の理解は、決してアボリジニのような狩猟採集民に独特のものではないだろう。確かに、私たち日本人は、文字を中心とした教育やコミュニケーションに慣れていて、しかし、言葉で表現された概念や事物に出会ったときでも、それをイメージの媒介なしに理解し、把握するのは困難であることが多い。

例えば「パリの街」という文言に出会ったとき、私たちの頭には、エッフェル塔やセーヌ河畔のカフェテラスの視覚的シーンが浮かび、さらには、シャンソンの声さえも聞こえてくるのではないか。もっと抽象的な言葉、例えば「非ユークリッド幾何学」という概念を習った際にも、それを理解しようとした私は、頭の中に、はるか向こうのほうで交差し合う直線の図像を思い浮かべたことを記憶している。図像的に表現できない純粋に抽象的・論理的な、例えば「正義」という概念についても、それを理解しようとする際に、いろいろな実際の場面の図像的イメージと結びつけて把握しようとするのではないだろうか。

こうして、自らの内に把握した概念や事物をほかの人に伝えようとする場合にも、イメージは大きな役割を果たしているのではないだろうか。「パリの街」を人に説明しようとする際、私たちは、自分が持っているパリのイメージを伝えようと、言葉で表現してみたり、絵に描いてみたり、シャンソンを口ずさんでみたりする。そうすることで、相手の頭の中に、自分の持っているものだけで似通ったイメージを作り出せるように努める。この努力の結果、話し手と聞き手の間に、似通ったイメージを共有することができれば、それがコミュニ

ケーションが成功したことに相当する、といえるのかもしれない。

このように考えれば、外界からの情報に基づいてイメージする営み、そのイメージを外界に向かつて表現する営みこそが、コミュニケーションの本質ではないだろうか。

### 「メディアとは」

ここまで考えてきたコミュニケーションは、発信者と受信者両者の存在を前提とするものであった。こうしたコミュニケーションを媒介するものが、広くメディアと考えられてきたものである。しかし、アボリジニたちが轍を見て、いつ頃何人に乗せた車が通ったのかを推測する例からわかるように、必ずしも意図を持って発信者が作り出したものではない轍からさえも、受信者は情報を読みとるのである。動物の足跡や轍は、アボリジニにとって大きな意味を持つメディアなのだ。発信意図のないもの、そこに転がっている石でさえも、そこから情報を読みとろうとする人間にとっては、メディアにはかならない。

そして、もの言わぬメディアから情報を読みとることができるのは、そこからイメージを紡ぎ出すことのできる人間の力なのである。

私が本書で考えてみたいのは、メディアと人間の関係を、イメージをキーワードとして読み解くことである。人間がメディアから情報を得てそれを理解し、判断の材料とするとき、すなわち、イメージを形成しようとするとき、メディアがイメージ形成にどのようなかわりを持つのであろうか。また、コミュニケーションをはかるためにメディアを使うとき、す

なわち、発信者のイメージが受信者のイメージに変換されるとき、メディアの種類や性格の差異によって、どのような違いが生まれるのであろうか。マルチメディアやインターネットなど、さまざまな電子的メディアが身近な存在となってきた今日、あらためてメディアとイメージの関係を考え直してみよう、というのが本書のねらいなのである。